

九月五日(日) イヤタカを会場に催された、当クラブ主催「国際交流のつどい」には、各国からの留学生十三人を迎えて、ケーキとウーロン茶で午後の一刻を過ごした。

最初に九嶋会長の挨拶、国際教養大学事務局学生支援班々長関根浩一氏より大学の概要、開学の基本精神、寄付金依頼の話があり、ティーパーティに移った。留学生はアメリカ(六名) モンゴル(五名) 日本人(二名) 計十三名(名簿参照) が参加。それぞれおぼえたでの日本語や母国語を使つて

ヒューマンクラブ 夏の研修

とき 平成16・9・5
ところ イヤタカ

講演と国際交流会

挨拶をした。たまたま新学期が始まったばかりー田中寒山(尺八) 赤川郁子(琴) 両氏による演奏に聴き入り、しばしの間ホームシックを忘れさせたようであった。(大学側談)

学生支援班シニアスタッフの小林和世氏の流暢な英語による通訳は、舌を捲く見事さであった。この他大学関係者として中嶋学長の他 勝又美智雄教授・佐藤邦明教務班スタッフ・戸井田香菜子学長秘書の各氏が参加した。このあと学生達は帰り、中嶋学長の講演に入った。



※左より金田夫人・中嶋学長・九嶋会長



▲大学の趣旨、内容を説明する関根浩一学生支援班班長



左より 秋元辰二氏

勝又美智雄教授

狩野豊太郎副会長



23 前列左より 国際教養大学学長秘書 戸井田香菜子氏、教務班 佐藤邦明氏

ヒューマンクラブ国際交流の集い
国際教養大学側出席者

16. 9. 5
於イヤタカ

1 留学生

① Kelly Benham	ケリー ベンハム	米国
② Gantulga Budjargal	ガンツラグ ブドジャールガル	モンゴル国
③ Irwin Castille	アーウィン カスティル	米国
④ Burtujin Dashunyam	ブルトジン ダシニヤム	モンゴル国
⑤ Matthew Heim	マット ハイム	米国
⑥ Naranchimeg Khalzan	ナランチメグ ハルザン	モンゴル国
⑦ Tserenpurev Khutagt	ツェレンプレブ フタグト	モンゴル国
⑧ Laura Lundquist	ローラ ランドクイスト	米国
⑨ Tony Mansourian	トニー マンソリアン	米国
⑩ Daniel Peskorz	ダニエル ペスコーズ	米国
⑪ Burmaa Zurgaa	ブルマー ズルガー	モンゴル国

2 学生(秋入学者)

⑫ Emiko Shimojo	下條 永美子	神奈川県(日本国)
⑬ Manabu Shindo	進藤 学	秋田県(日本国)

3 スタッフ

⑭ 関根 浩一	学生支援班長
⑮ 小林 和世	学生支援班シニアスタッフ
⑯ 戸井出 香菜子	学長秘書
⑰ 佐藤 邦明	教務班スタッフ



自然の空気を景色を楽しみながら、運動施設の周りや大学周辺の森などを自分のペースでジョギングやウォーキングをします。長距離を歩く時は疲れる～。



ブルトジン・ダジニラム(蒙) ケリー・ベンハム(米) アーウィン・カスティル(米) マット・ハイム(米)



タニエル・ベスコース(米) ローラー・ランドクイスト(米) トニー・マンソリアン(米) ツェンブレブ・フタグド(蒙)



ハルサン・ナランチメグ(蒙) ブドジャルガル・ガンツラグ(蒙) 進藤 学(日) 下條永美子(日)

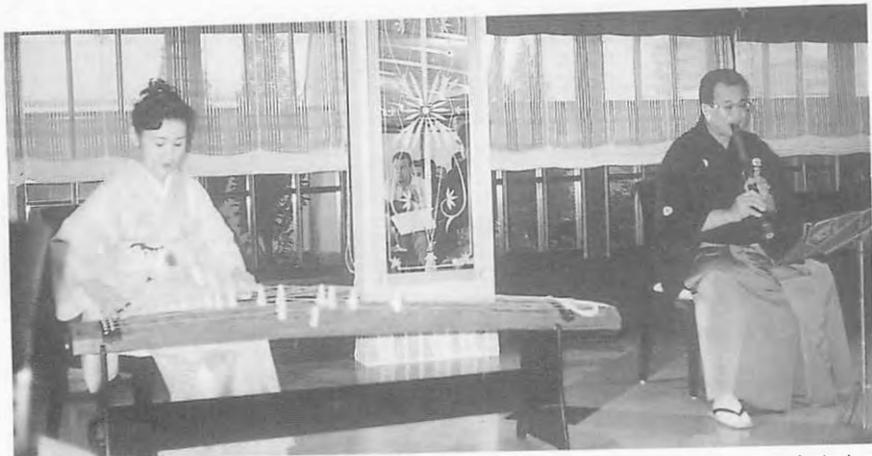
▲おぼえた日本語や、母国語を使って、自己紹介やスピーチを行う留学生の皆さん。

▲リスニングだけでなく、意見や経験を自分の言葉で表現するスピーキングの力も必要です。リスニングで扱う内容は会話から講義まで幅広く、特に会話表現は日常会話に役立ちます。ポキャブラリーがないと大変！ポキャブラリーノートを作って語彙を増やします。

授業風景



◀「千鳥の曲」二重奏の両氏



▲「黒田節による幻想曲」演奏の赤川郁子氏、尺八「朝風」吹奏の田中寒山氏



▲スピーチを行う勝又美智雄教授

◀流暢な英語力で通訳に努める
小林和世氏(学生支援
シニアスタッフ)



演奏・スピーチ



▶大学立ち上げに当っての献身的な労
を中嶋学長からねぎらわれた(席上)
教務班・佐藤邦明氏(ミニソン多摩校)
(銀メリ出向)

懇親会

平成16・9・5

於 イヤタカ



▲佐野春子氏 寺田光和氏 (両副会長)



▲五十嵐修司氏 熊谷琢次氏



▲伊勢博子氏 加藤 明氏



◀
右から
武藤 拓自氏

関 昌威氏
(アキタ・セロックス社長)

鈴木 憲氏
(同上 社員)

▶
左から
長谷川健悦氏
(秋田魁新報 社員)

菊地雄輔氏
(秋田基準道具 社員)





▲九嶋会長／国際教養大学学長／スタッフ／留学生／金田龍子氏／他ヒューマンクラブ会員 記念撮影

侃侃 侃侃 諤諤

ヒューマンクラブは創立以来、その言論活動の一環として、対立する意見を平等に同じテーブルに載せて、読者に提供、その賛否の拠つて来るところを明らかにするということをつらぬいて来た。

今回取り上げるのは「国際教養大学」である。この大学の開設については初めから県民に賛否両論があつた。その論拠を両者に求めてみる。

最初に反対論 A 氏の論点を一言にまとめるとすれば、この大学の存在が将来秋田にとつてなんのメリットがあるか——ということである。全国で競争率トップという難関を突破して集まった

天下の秀才達は、卒業するとそれぞれ国内・国外に活躍の舞台を求めて散つてしまふであらう。元々この秋田にアイデンティティを持たぬ彼等は、なんの還元も秋田にもたらさないことは明白である。この秋田の風土と伝統あるいは明日の秋田の現実にくサビを打ちこむものがそこにあるのか！ムダな投資と言わざるを得ない。——

賛成論者 B 氏の意見——これまで日本は、国連に多額の拠金をしながら、英語力の未熟のために、国連職員の使用率は、他国より低い。このことはかの緒方貞子氏も歎いていたことだ。それらを根底から拂拭するべく、徹底した語学訓練を積み、併せて国際教養を身につけさせ、やがては世界各地で活躍する人材の発進拠点と秋田がなる。こんな素晴らしいことはないではないか。

壮大なムダ費いというが、県立大学の建設に費消した数十億に比べれば、既成の施設（元ミネソタ大学）を使つて、その出費は八億そこそこである。秋田は物事の判断基準をもつとグローバルな視点において心を開いて行かなければ、今日の国際潮流において秋田の明日はない——。

ちなみに A 氏、B 氏共に J 党とか M 党とかの政治的な背景を一切持たない識者であることをつけ加えておく。

さて九月五日、その論争の焦点である、「国際教養大学」の学長中嶋嶺雄氏（経歴、別頁参照）から講演をいただいた。演題は「国際社会の変動と日本の大学」。その要旨をここに掲載する。読者の皆さんはこれを読んだ上で、問題の「国際教養大学」の秋田における存在意義についてご意見を寄せられたい。

演題 国際社会の変動と日本の大学



中嶋 嶺雄 (なかじま みねお)

国際教養大学学長／国際社会学者

〈略歴〉

1936年、長野県松本市生まれ。文学士（東京外国語大学中国科、1960年）国際学修士（東京大学、1965年）。社会学博士（東京大学、1980年）。1977年、東京外国語大学教授。1995～2001年、東京外国語大学学長。1998年～2001年 国立大学協会副会長。現在は、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長、外国語専門部会主査）、財団法人大学セミナーハウス理事長などを兼務。オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授を歴任。平成15年度「正論大賞」受賞。

著書は「現代中国論」「中ソ対立と現代」「北京烈烈」（サントリー学芸賞受賞）「中国の悲劇」「国際関係論」「中国・台湾・香港」「21世紀の大学」など多数。

演題 国際社会の変動と日本の大学

国際教養大学学長 中島 嶺雄

本日は国際教養大学の学生達に、皆様方の励ましをうける機会をつくっていただきまして、本当に有難うございます。特に留学生の諸君は、秋学期のために秋田に着いたばかりであります。右も左もわからない状況の中で、この様な暖かい歓迎の機会をいただいたこと、特に先ほどは琴や尺八の演奏もありまして、日本語はまだよく出来ないのですが、音楽は、言葉の障壁を越えて通じますので非常に印象深かったのではないかと思います。

私がこうして新しい大学についてお話しする機会が与えられましたことを光栄に思っております。

当ヒューマンクラブの機関誌「原点」を読ませていただきましたして、秋田の文

化をささえる会員皆様に敬意を表するわけであります。このところお話ししたことが沢山積もっております。一日、中央教育審議会の大学分科会で、文部科学省から、日本にある外国の大学を認可するという提案があり、事前に私の所へも、説明にきました。それと又同時に日本の学校法人なり大学が外国に作った分校も認可するといった議題がありましたから、私は特に発言を求めて新しい規制緩和の流れの中で、そうしたことについては賛成だけれども、一体、文部科学省は十数年前に日本に沢山でてきた外国の学校がどういう結果をとげたのか、そこにどういう問題があったのか等を一度でも総括し、検討したことがあるのかと、ミネソタ

大学秋田校の例を取りあげて、質しました。

今回、私共は国際教養大学という全く新しい学校を立ち上げたわけですね。しかし、雄和町、秋田県は、そのために大変なご苦労したわけであります。そういうことを総括せず、今度新しい制度を導入する。―その一つの例としてテンプル大学のことがあがっています。したけれど。

私もテンプル大学に行ってみました。がかるうじて息の根を保っている程度なのです。新潟県に出来た中条の南イリノイ大学は、だめになって正に死ぬうとしていて。そういう矢先にもとづく規制緩和して、新しい法律にもとづく外国の大学を認可しようとしている。

これが十数年前に行なわれていれば、今雄和町が抱えている、又、育英会が抱えている問題がなくてすんだのですね。こういう大きな転換にさしかかった、この問題をまず皆さんにお話ししたかったわけでありませう。

実は、昨日からきょうにかけては、私が理事長をつとめている財団法人大学セミナーハウスという、国公私立の壁を越えて、先生も生徒も、泊りがけでつどいあう、そういう施設が東京八王子にあります。ここへ行って来ました。

来年創立四十周年をむかえるわけですが、今回は教員セミナーがありました。最近のライフスタイルの変化によって、なかなか学生は先生と一緒に宿泊ということとは、盛んでは無くなったのですが逆に、教員セミナーが盛況なのです。ファカルティデベロプメントFDという言葉は正に大学セミナーハウスから生れたのです。

Eラーニングと

フェース・トゥ・フェース

もう一つ、スタッフ・デベロプメントといって、職員が研修しあったり、研究結果をもちよるセミナーがあります。

きのうの教育セミナーのテーマでは、Eラーニングということがとりあげられたのです。つまりインターネットの時代に実際の大学の授業がフェース・トゥ・フェースで行なわれるのではなくて、情報機器を使って、大学のカリキュラムを展開する。これも今回、中教審のもう一つ作っております「21世紀日本の大学の将来構想」の中にもかなり教育セミナーは大きなウエイトで出てくるわけです。全国各大学、あるいは文部科学省からも来て、大変熱心なセミナーをやっております。国際教養大学からも、ウエイ先生という中国人の女性のIT関連専門の方が出席しております。

そこでも問題になり、文部科学省の

新しい二十一世紀の高等教育のあり方、グラントデザインの中にもEラーニングのことが出てくるのですが、それほどまでに大学の型が急速に変わっていくことなのです。

ただ、私の結論を申し上げますと、Eラーニングの時代になればなるほど、フェース・トゥ・フェースという本当に、先生と生徒の膝を交えたキャンパスライフというものが、欠かせなくなるのではないかと。これは、日本に放送大学が出来た時の私の疑問でもあったわけですが、究極的に放送大学と通信制大学だけを見ると、大学がいらなくなってしまう訳ですね。家にパソコンがあれば勉強が出来てしまう訳だけれども、それではたして、大学かというところでは無いと思うわけです。ITを大いに活用しなければならぬし、そういう時代ではありますけれど、そうなればなるほど、つまり、ITがデジタルだとすると、もう一つのアナログ的な要素が、非常に重要になるのが、二十一世紀ではないか

※注 Eラーニング(インターネット(電子メール)を活用した授業(居宅学習))

と思います。

そういう意味では、国際教養大学は、学生一人あたりのコンピュータの台数も、日本一だと思えますし、ITの関連についても今後強化したいと思えますけれど、又同時に、先生一人あたり生徒数が今のところ二、三人という、小人数教育のよさを保っている大学として出発することが出来ました。つまりは、キャンパスライフがいかに重要かということなのです。そのためには、あちこちの大学がキャンパスを立派にしておりますが、建物を立派にするのは、お金さえあれば出来ることで、その中味、フェース・トゥ・フェースの教育が、どの様に行なわれるかという中味だと思えます。私達の大学はこの点でも非常に優秀な先生方を全世界から集めまして、恐らく日本でも最も誇れるような教育が展開されております。それから、優秀な職員がいるということも非常に重要な点で、国際教養大学の経験が、今の文部科学省の「21世紀の大学の将来構想」の中にも職員の資

質がいかに重要かということで、書きこまれることになっております。

新しい試みの根本は、日本の高等教育の再編、再建と言ってもいいでしょうね、そういう大きな課題へのチャレンジではないかと思っております。

急がれる語学教育システム改革

何と言っても二十一世紀一番重要なのは教育だと思う。そして日本の周辺を見回しますと、いろいろの問題はあるにせよ、中国、韓国、台湾、シンガポールとアジアの国々は今一斉に、教育重視に走っております。

ですからそういう情勢の中で、日本は明治維新以来教育先進国といっていましたけれど、はたして今も先進国だろうか、アジアの国々から本当に優秀な人材が日本へ留学に来るだろうか。

優秀な学生がみんなアメリカへ行ってしまうって日本へは、なかには出かせぎ目的で来るような留学生もいて、社会問題をおこしている。こういう事を

考えますと、日本は、国内的に受験重視で、偏差値で、競い合っているですね、しよせん日本の中だけの話であって、国際的にみれば、ほとんど意味がないではないか。

これからの国際社会はグローバル化が進展する一方で、各自がアイデンティティ、つまり各地域の特性を十分に主張しなければならぬ方向に変わりつつあります。それなのに、本当に国際社会の中で我々の知的基盤社会とか、知識社会を支えて行く人材が生れているのかどうか、ここに大きな問題があるように思えます。

国際社会が急速に変動するなかで、これからの日本がなすべき一番大きな課題は、いろんな貢献の仕方があると思えますけれど、知的国際貢献だと思えます。そうあってほしいと思うのです。だから、そのためには人材が必要であって、その人材は先ず、外国語の運用能力を持っていなければ、全然問題にもならないわけです。

Eラーニングといえはですね、昨年

秋に（今年もあるのですが）アジア太平洋大学交流機構（UMAP）という、これは私が国際事務総長なのですけれども、その理事会が、コタキナバルでもありました。コタキナバルは、東マレーシア、昔のボルネオですね、東京からの直行便がありますので、東京から五時間かけて着いた現場で、すぐEラーニングをめぐる国際シンポジウムをやっているわけです。

しかもコタキナバルというと、昔は首狩族もいた未開の地というイメージを多くの人は持つと思いますが、今、全く違っています、サバ大学はすく立派な大学で、半島全体が大学です。海洋学とか、マリンスターイとかフィシヤリイとか、勿論ビジネスの学部もあります。

私は文部科学省のお役人に、ぜひこの大学を見るべきだと勧めているわけですけれども。

マレーシアでも、そんな大きな変化があつて、そこでやっていることはEラーニングをめぐる国際シンポジュー

ムなのです。そこにはアジアや欧米から、Eラーニングの専門家や先生方が集つて、もちろん英語でディスカッションしている。そういう世界がすぐそこで始まつているわけです。

日本ではたして、Eラーニングの国際シンポジウムがすぐできる体制にあるだろうか。

こういうことを考えると、日本が教育先進国と言われながら、いかに立ちおかれてしまったかと言うことが、お分かりいただけると思うのです。そして、そういうことからしましても、教育に力を注がなくてはいけない。

ですけれど、今までの様な教育をやっていたらだめなんです。今までの教育は、どこに問題があつたか徹底的に反省して、全くそれと違った教育システムを作り上げていかない限り日本の高等教育は世界の中で、大きく立ち遅れたことになりはしないか、そういう意識を私はここ数年国立大学の学長をやつてみてなおさらのことに感じっております。

従来型の教育の一番の欠点は、能力に応じた教育をやっていないという事、能力に応じたカリキュラムを編成してないということなのです。それは日本の戦後平等主義教育の悪弊です。何かみんな一等賞をとるように非常に低い所に水準を合せていく。英語教育もそうですね、その先生が、文学の専門家であれば、一つの英文学の世界を一年間みんなに少しづつ読んで訳させて、それで単位を与える。学生の能力の差は一切、かまわないわけです。どういふところへ、その学生が志望しようとしているかも全くおかないし一律の授業をやっているわけです。その結果、日本人の学生は10年間英語を学んで英語がしゃべれない、こういうことを放置しているわけです。そして卒業証書を与えている。ここに欠陥があつたわけです。実は能力に応じた教育とは、「国民は能力に応じた教育を受ける資格がある」と、憲法に書かれていますし、教育基本法にも書かれています。ところが憲法改正はけしか

らんとか、教育基本法は改正すべきではないと声高に言う人に限って、この能力に応じて教育されなければいけないという、憲法や教育基本法を無視して平等主義に走っているわけです。

たしかに人格としてはみんな平等でなければいけない、しかし、それぞれの能力に応じて、キメ細かな教育をすることによって、それぞれの学生の習熟度を向上させていくという教育をしていないわけですね。

国際教育大学の教育システム

私共は、創設準備委員会の段階から、それとは全く違った教育システムをとろうということになっておりました。

そして、特に英語で全ての授業をするわけですが、英語に関しては、かなり優秀な学生が集まりました。

前期日程では二十三倍強、後期日程では四十五倍という、この間の新聞では、日本の公立大学の中で一番競争率が高い。国立大学をいれても、東京芸

大の美術を除外すれば、うちがトップですから、優秀な学生が集まってくれました。しかしながら、英語のテストをしてみますと、あきらかに、いろいろの差があります。従って、我々は入学式の前に、TOEFLという英語のテストを、全員に課しましてクラス分けをしました。

そして七・五週たつて、もう一度、テストをして、それで再びクラス分けをしました。

一学期のおわりには、もう一度それをくり返す。こういう風になると学生達は、やる気を出してくるのですね。EAP（学術目的の英語）とっていますが、大学の授業がきける英語なんですね。単に口先だけで、英語が話せることを目的としているわけではない、本当中味のある会話力。ですから、これは恐らく語彙の多さも必要となってきましたよね。国は「ゆとり教育」と言って英語は二〇〇ワード位しか、教えていないんです。もつとも、二〇〇ワードをきちんと教え習得してい

れば基本的な会話はできるんですがね。

秋田県からきて外国人とははじめてだという学生もいるわけです。そういう人達は、むしろ、EAP、1から入っていた方がいいんです。慣れていって、次の七・五週後にがんばればスナップアップするわけです。彼等は、全然コンプレックスはもたずに、自分は、会話力が弱いから、あるいは、先生の授業が聞きとれないから初めは、1の方がいいんだという学生がいて、全然差別されているとは思いません。がんばれば次の所へ進めるわけです。そういう教育をやっている、少なくとも一学期終えた今の段階で、このTOEFLのテストのスコアでいうと、百点以上伸びた人もいます。ある九州から出て来た学生で、入学時は、数学、国語は出来たが、英語はよく出来なかった。それだから、最初は、英語についていけないと不安があつて、学校へも出てこないことがあつたり、父親からも手紙がきたり、私も責任がありますから、本人と話したり、父親と話し

たりしまして、結果的には、一学期で、英語力が一〇〇点位アップしましたね。全然問題がなくなりました。

平均すると四十五点くらい上りましてから、ほぼ全員TOEFLで五〇〇点以上、最高は六〇〇点を越えている。こういう教育をどうして各大学がやらないのか。例えば、ジャーナリズムの世界に行きたいという学生には小説を読ませることよりも、BBCやCNNの放送を、毎日の様に聞いてもらえばいいのですよ。そうすると、世界のニュースが分かるようになります。

その結果、大変うれしいことに、この間のワークショップでは、まだ入って三ヶ月の学生が、今のイラク問題や、公害の問題とかを堂々と英語で論じ合っているんですよ。うれしいことでしたね、学生が本当に生き生きとやっていると、そういうことを皆様にもお話できるわけです。

これが一つの教育方針であります。もう一つ次の大きな問題は、これは日本にはいくつかの大学、東大をは

じめとするピラミッド構造があるわけですが、しかし、みんなどの大学も同じ様な大学ですね。

都立大がなくなつて、首都大学東京になる。その理事長に予定されている高橋宏さんが、私どもの大学に見学に行つていました。首都大学東京は、都民の税金を使うわけですからね、今までの都立大学は悪い大学ではありません、私の友人も沢山おります、が、しかし、ミニ東大だつたんですね。

どうして、都立大学か、問われなければいけないですよ。

そこで、首都大学東京と名前を変えて、東京の都市計画とか首都のあり方とか、そういうようなデザインもできるような学部もつくる。

今までそれがないわけですから。横浜市立大学も今度外国人がはじめて学長になるのですが、今までどちらかというと、やや進歩的ミニ東京的なものがあつたのですが、これが、がらっと変わる。大阪市立大学が一足先に変わり始めています。変わり方が早くて、

しかもうまく行っているのが立命館大学ですね。これは本当に頭が下ります。立命館というところ、皆さん、いろいろなイメージを持つと思いますが、今や、大分のアジア太平洋大学を中心に、国際化を一生懸命にやっています、留学生が半分ですが、留学生の就職は一〇〇%でした。

こういう風に、大学の顔がもつと見えなければいけない時代になってくる。今、日本には国立大学がいくつあるとお思いですか。私が国立大学協会の副会長をやっていた頃は、九十九ありました。それが少し減つて今は、八十九なのでね。

山梨県立医科大学と山梨大学が一緒になった。これは、本当の統合ではないのですね、当然そうならないところ。

今後、一番大きな統合がでるとすると、大阪大学と大阪外国語大学です。

これが統合されると、かなり本格的な統合となりますけれど、今までの統合は、お互に既存のものを形をそのま

ま維持してくつ付くというもので、何らかの血の出る様な、ある種のリストラもなくして統合するものでした。

それにしても国立大学の数は多すぎます。公立大学も七十七もあるのですよ。

昔は、公立大学という都立とか、大阪府立とか横浜市立とか、北九州市立とか、こういう所を中心に十いくつしかなかった。ところが最近秋田県にも出来ているように、急速に公立大学がふえまして、特に看護衛生系が増えたことよって、今、七十七あるんです、そうすると、国公立大学合わせ百六十六校あります。これもちよつと多すぎる。これがみんな、二〇〇七年問題という、二〇〇七年に学生定員と大学志願者が同じになるという状況。そして現在でも私学において志願者が定員に満たないところが三割という状況、大学冬の時代をむかえます。

これはある意味では、自業自得であつて、みんな同じような大学を作ろうとしてきたからです。何かもつと別の

大学のキャラクターを出すべきです。我々のように全部授業を英語でやろうという大学が日本では一つもない、留学を全員に義務づけるという大学もない、たまたまそういう状況の中で、昨日も、大学セミナーハウスで一緒にしたのですが、早稲田大学に国際教養学部が出来たのですが、早稲田、慶応となると、やはりブランド名があるのですね。

それがない秋田でやるとなると、アイデアで勝負しなければいけないと思つてやってきましたが、皆様のご協力、今のところ大変好調なのですね。

お金は、いくらもかけていただけないです。校舎改修に十億円もかかるか、かからないか、年間予算も十億あるかないか。横浜市立大学でさえも、二四〇億円あるわけでありますから、そのことを思うと非常に安いコストで全国に名が知られるような大学が出来たということは、ぜひご理解いただきたいと思います。(傍線編集部)

国際教養大学の特色

国際教養とは

さてそこで、考えていただきたいのは、全国百六十六の国公立の中で、地名を大学の名につけていないのは、わが国際教養大学ただ一校であります。

日本の大学はみんな地名がついてるのですよ。地名によつて、ローカルティがあると云うことはいえるかもしれませんが、地名がついた国際大学はいっぱいありますね、ほとんど各県何々国際大学という風に。我々が、秋田国際大学という日本名をつかなかつた一つの理由はそこにあります。

ですから全部の国立大学にも地名がついているのですよ。地名がつかないで出すということ、正に国際教養という二十一世紀の新しい大学のあり方を示していると解釈していただけると有難いのです。

それでは、国際教養とは一体何なのか。これは先ず三つの要素があつて学生諸君は、その三つのハードルをのり

越えてほしい。

一つは、外国語、特に英語によるコミュニケーション能力、これは英語によつて議論できる能力を十分身につけてほしい。

それは実現可能なのですね。二番目には教養を広く身につけてほしい、インターナショナル・リベラルアーツというのは、全く新しい概念であります。外国には、リベラルアーツ（教養）という言葉はあるけれどもインターナショナルは当然つけてありませんね。我々のインターナショナル リベラルアーツというのは、外国語、特に英語です。中国コースの人は中国語もやってほしい。

そういう教養も非常に重要なのです。教養も出来れば第一級の教養を身につけていただきたいと思ひまして、渡辺玲子さんという、世界的に活躍しているヴァイオリニストが十数名前後のクラスで実際教えているのですね。第一級の先生に教えてもらいたいと思ひます。

その他に、文化人類学、比較文学、社会学等々の教養科目をきちんと修めてほしい。

教養教育は、実は日本では、ほとんどだめになつてしまつたんです。これは九〇年代の初頭に、大学大綱化という制度改編があつて、一方では、大学院教授というのができて、皆さんお気づきのとおり東北大学教授という肩書きでなく、東北大学大学院教授となつた。その前後に今度は、教養部とか教養学部がほとんどなくなつた。

本当は外国語の教授は、大変大事だと思つたのですね、全く違つた世界の文化を教える。ところが、専門教育の先生の方がステータスが高く、語学の分野のほうが低い様な意識を先生方自身も持つてしまつた。文部省も悪かつたのですよ。それまでは、三、四年生を担当する専門の教官と、一、二年の教養を担当する教官を給料の面でも差別してしまつたから。

教養教育というものが、ほとんどなくなつて一年の時から、ろくな教養も

知らないのに、読み書きソロバンも不自由なのに、専門をやらせるわけですよ。そうすると、本当に、専門のノウハウは知つているけれども、学問的な幅広さ、素養をほとんど欠如した人達が、育つていくということになりますね。大変な問題です。

それで、教養を中心とした教育中心の大学をつくらうということになりました。

三番目には、そうは言つても教養主義で満足することは出来ない。やがて、皆それぞれ、プロフェッショナルになつて行くわけですから、その時に一年の留学を経て、グローバル・スタディズとグローバル・ビジネスを勉強してほしい。これも国際的な互換性を持つと思つているんです。ですから秋田の国際教養大学で勉強したものが、そのまま、アメリカの単位として認められる。アメリカで勉強したものも、日本で単位となる。そのすり合せもカリキュラムを作る段階でかなりやりました。中国の大学のカリキュラムとこち

らの大学のカリキュラムもすり合わせる。

例えていえば、中国は今、映画が大変おもしろい。それで中国の映像芸術のカリキュラムもあえて入れている。あるいはアメリカの例では、ネイティブ・アメリカンの歴史も、ちゃんと教える。それからノース・アメリカンのカテゴリーの中では、カナダを含め、又、メキシコを含めた自由貿易圏に対応するような授業も設定する。そういうカリキュラム上のすり合せもしています。カリキュラムにおいても、能力に応じて段階的にとれる様になっています。

ユニバーシティタウン構想

したがってこの秋からは、英語のEAPを卒業した学生は教養教育に相当した基盤教育、ベーシックスタディズに進んで行くのです。そして、来年の秋ぐらいに、ベーシックスタディズの単位も、早くとれた人は留学してもらい、そして専門教育に取りかかっても

らう、というふうに、考えております。留学の場合も、ただ、大学として提携校を作っただけではいけない。全部、相手の大学の水準とか、カリキュラムをチェックする。

先週は私がモンゴルへ行つて一緒に飛行機で五人の学生を連れて来ました。この学生は、非常に英語力のあるモンゴル人文大学（学生数、三〇〇〇人位）で選ばれた学生です。日本へ来て、みなさん方からお力添えいただいて、奨学金をさし上げるとか、いうことにしています。彼等にとつては、本当に大きなチャレンジです。質的水準の高い人達であつて、単なる、留学生をかき集めてくるということでは決していたしません。モンゴルから学生が来たことで、将来は又日本からモンゴルへ行って一冬過してみるといふ学生も、出てくるかもしれませんね。アメリカへ留学するだけがいいわけでなくて、たぐましく国際協力や国際的な場へ出るという人は、モンゴルの冬を過ごしてみる。私も実は、零下四十度のモンゴ

ルの冬を短いですけれど体験したことがあるのですけれど。日本とは別世界の建物と言ひ生活環境と言ひ大きく違ふ中で、モンゴルからきた彼等がどんな思いでいるかということですよ。

そして、そうした状況の中で、なんといっても特色を十分に出していくことが必要ですし、うちの学生には、母語、国語力が非常に大事です。ジャパニーズ・スピーキングの能力をみるとか、入学試験でも、国語力をきちんとみようとしております。たんに漢字を書けるということではなくて、論理構成とか文章力、表現力をみます。

結局国語力がしっかりしてないと英語の表現力もだめなんです、そしてできれば、学生達には英語以外にもう一つの言葉をせひ学んでほしい。それは、例えば、アジアの言葉がより適切でないか。母語、そして英語はかなり出来るようになってますから、もう一つアジアの言葉を学ぶことによつて、非常に世界が広がりますよな。

他の国へ出かけて、その国の言葉を

おぼえる。すると、世界はさらに広くなりませう。

外国語を学ぶということは、あくまでもコミュニケーションのツールでいいわけですが、しかし、一つの言葉を学ぶということは、一つの世界が広がることです。単なる便宜上の手段ではない。ですからぜひみなさん言葉はいつの時代でも生涯学習でよいですから、国際教養大学に科目等履習生で入っていただいてもいい。中国語など、やがては韓国語、ロシア語も近い将来、開講しようと思います。

将来、今の雄和町のキャンパスが、専門職、大学院もできて、職員も入れて、一〇〇〇人規模の大学町が生れて、そこがいつも異文化空間として、国際的な色彩を發揮できれば、日本にも本格的な大学町が生れるのではないか。日本には、ユニバーシティ・タウンという文化はないんですね。

ところがアメリカは、例えば、コネル大学へ行くのに、ニューヨークからイサカまで、飛行機で行くと一時間。

大変な田舎ですが、そこへ行くと田舎の中にばつと、大学町がある。

丁度、羽田から、ここまで五十五分位、そこへ行くとユニバーシティ・タウンがあるということになれば一番いいのではないか。そこから世界に発信し、秋田から人材が育つてゆく。

それが秋田県に対するお返しになるのではないかと思っております。

どうか、今後ともよろしくご指導ご支援をいただきたいと思いますし、秋田から一人でも多くの学生に入っていただきたいので、皆さんのお知り合いの方にこの大学にぜひトライしてほしいと思います。

勿論人試は激しいですから一点の差で切られますけど、これも副学長のクレゴリー・クラークさんの提言で、我々は即決できましたね。国立の大学は、教授会で、会議ばかりやっていて、みんなの賛成を得るために、最後は、水で薄まった結論しかでない、しかも、タイミングがずれた意志決定がなされる。ですから我々は、いいこと

は、すぐきめられるようにという学長のリーダーシップの下に、教官を対象に迅速な意志決定をしておりますので、暫定入学制度をやることになりました。一点の違いだけでも、英語だけでは、他よりも特別によいとか、あるいは、やる意欲が強い学生とかを暫定入学生として推薦入学以外でも確保したいと思えます。

皆様方、ご子弟の方々、一人でも多くに二十一世紀型のこの大学に入っていただきたいと思えます。

今後とも、よろしくお願いいたします。



昭和四十六年三月一日 創刊
平成十六年十月二十日 発行

地域文化誌

原点

No. 159

Human Club
ヒューマン・クラブ



講演 要旨 国際社会の変動と日本の大学 中嶋 嶺雄
すいそう “オロロン街道” (稚内ー小樽) 依本 悟